

対魔忍ユキカゼ2 ～双
雷風詩～

茶玄

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

対魔忍ユキカゼ2より、ゆきかぜエンド後のAfter エピソードとなります。

凜子After “藍空風歌” を書き終えて、次はゆきかぜエンドの達郎くんも救わねばと思い創作に臨みました。それにしても、達郎くんは本当に世話の焼ける主人公ですね。流石は寝取られ男子筆頭…

物語は聖修学園潜入任務より1年4ヶ月後、凜子を始めた対魔忍大部隊は、第二次強襲作戦により同学園を制圧。ゆきかぜを救出するも、首魁である黒井（淫魔の王）や不知火は逃走し消息不明。

その後、達郎はゆきかぜと破局し学園を中退。そして、達郎が里を出奔して3年1

0ヶ月後、東北の地方都市で消防士として働く達郎の身に起きるある出来事から始まります。

前作同様、原作ゆきかぜエンド後から今作開始までの経緯は、上記あらすじのみとなります。ごめんなさい。

※空白期間の出来事は、キャラクター紹介&設定にて少しだけ説明しておりますので、ご一読いただければ幸いです

※筆者は「対魔忍ユキカゼ1&2 Animateion」以外の対魔忍シリーズを一切プレイしておりません。その他は公式サイトやwikiを軽く見た程度ですので、その旨ご了承ください

目次

キャラクター紹介&設定	1
Main story	
第1話 招かれざるもの	11
第2話 二度目の誓い	22
第3話 続く想い、終る誓い	34
第4話 There's No End	47
d i n g	
Side story	
結生の恋愛模様	62

キャラクター紹介&設定

「キャラクター紹介①」

秋山 達郎

本作の主人公。聖修学園潜入任務より帰還後、幼馴染のゆきかぜが敵方に屈した責任を感じ、自宅にて引き籠り生活を送る。

強襲作戦に一切関与しなかった達郎は、良心の呵責に苛まれ、食事や排泄を含め外界との接触を一切断つ。

当時の達郎の異常さは、ゆきかぜが目の前にも関わらず、本人の猥褻動画を糧オカズに自慰オナニに没頭するほどであり、それを機にゆきかぜからは一方的に別れを告げられている。

後日、達郎の状況を見かねた紫先生により、“アーベル”によるマイクロチップ療法を受けるべく緊急入院する。

手術を行った桐生医師をして「数日遅ければ廃人だった」と言わしめるほどの極限状態であったことが判明する。

マイクロチップ療法が功を奏し、心身虚弱状態を脱してから1ヶ月後、凜子を含め近

親者に相談なく学園を中退し里を出奔。

紫先生の恩情のもと、対魔忍下部組織の伝手つてを頼りに、東北の地方都市で消防見習いを1年2ヶ月勤めた後、消防士として正式採用され現在に至る。

対魔忍としては半人前に終わつたが、人命救助にかける意気込みは人一倍強く、同僚の静止を聞かず火事場に入入することも多い。

元々は正義感に溢れた好青年であり、消防士として懸命に働く内に徐々にその自信を取り戻しつつある。

遁術：風遁

異名：なし

身分：消防士

誕生日：2006年6月29日

技能：

逸刀流忍術「烈風炎操」

風を起こし炎を自在に操る。

達郎が火災救助のために編み出した補助遁術。

【キャラクター紹介②】

水城 ゆきかぜ

達郎の幼馴染。淫魔の奸計に陥り、性的快楽・悦楽の果てに達郎を裏切り、森田専属の淑女（奴隷娼婦）となる。

対魔忍部隊に救出されるまでの期間、昼夜を問わず男達と過激な性行為に及び、森田との間に子供を出産している。

第二次強襲作戦にて救出された後、本人の対魔忍復帰への強い希望を尊重し、敵性マイクロチップ “イブ” の摘出手術と “アーベル” によるマイクロチップ療法のみならず、性感常態化のための強烈な副作用を伴う投薬治療。更には妊娠後二ヶ月になる第二子の中絶手術までも行った。

最終的には強力な暗示療法を受け、聖修学園での陰惨な生活と中絶の記憶を改竄^{かいざん}・忘却し、早期の原隊復帰を果たした。

なお、ゆきかぜに施された暗示は、前後事実の整合性の担保と本人の心理的負荷を勘案し、記憶の改竄と忘却を適宜使い分けた手の込んだものとなっている（以下概略）

- ・ 聖修学園での性行為はノーマルなプレイ内容に改竄
- ・ 聖修学園で達郎には一切会わなかったことに改竄
- ・ 妊娠した子供の記憶は全て忘却 等

また、原隊復帰後の定期健診では暗示の作用状況の検査も行われているが、本人はそのことに一切気付いていない。

暗示療法により聖修学園当時の過酷な体験を失ったゆきかぜは、再会した達郎の愚行に激しい嫌悪感を抱くと共に陰鬱な空気にも耐えきれず、その場で達郎に別れを告げた。

現在は凜子と再びペアを組み、任務のかたわら母である不知火の行方を追っている。由緒ある家柄の同級生とも交際中であり、公私共に順風満帆な生活を送っている。

遁術：雷遁

異名：雷撃の対魔忍

身分：特級対魔忍

誕生日：20065年4月9日

【キャラクター紹介③】

秋山 凜子

達郎の実姉。ゆきかぜを救出すれば、必ずや達郎は元通りになると信じ、第一次および第二次強襲作戦に際し威力偵察等のあらゆる任務に奔走するも、全て水泡に帰する結果となる。

無力感に打ちのめされた凜子は、以降避けるかのように達郎との距離を置く。

後日、桐生医師より達郎を避け続けたことが、達郎の症状悪化を招き里を出奔する遠因ともなったと聞かされ、複数の職員が取り押さえるほど錯乱し恐慌状態に陥った。

現在はゆきかぜと再びピアを組むものの、内心ではゆきかぜが達郎に冷たく別れを告げたことに、未だ納得できずにいる。

遁術：空遁

異名：斬鬼の対魔忍

身分：特級対魔忍

誕生日：2063年6月2日

【キャラクター紹介④】

八津 紫

五車学園教官。達郎の現状を見かね、本人や家族の許可なく “アーベル” によるマイクロチップ療法を強行した。

達郎が里を離れる際にも当面の生活費と住居や職を用意し、再起を信じ達郎を見送った。達郎にとっては唯一の恩人。

【キャラクター紹介⑤】

桐生 佐馬斗

対魔忍組織に属する元妖魔の天才外科医（魔科医）で、マイクロチップ “アーベル” の発案者。

“ マイクロチップの摘出手術は特殊な技能が必要となるため、桐生医師にしか行えない。

【キャラクター紹介⑥】

高坂 静流

淫魔に与^くする元対魔忍。木遁の使い手であり、その類まれな諜報能力は今も衰えていない。

ゆきかぜと同じく森田に仕えていたが、強襲作戦時に主人を見捨て逃亡に成功し、以後の消息は不明。

【キャラクター紹介⑦】

森田 一豊

故人。聖修学園潜入時の達郎の同級生。後に親の資産に物を言わせて普通科から特

待生科に転入。ゆきかぜを専属の淑女（奴隷娼婦）とし淫行の限りを尽くす。

第二次強襲作戦時にゆきかぜを連れ逃走を図ったが、凜子に局部を次元跳躍の泡（逸刀流忍術 無限抱擁）で挟り取られた挙句、首を切断され絶命した。

【設定①】

マイクロチップ “イブ”

鷺津マテリアル社製のマイクロチップ。脳幹に移植すると性的調教に対する否定的思考を抱くと頭痛を誘発し、妥協や肯定的思考に至ると停止する。

無意識に痛みを避けようとする内に性的調教を受け入れ、全ては自分で選んだ結果なのだとして疑わなくなる。

【設定②】

マイクロチップ “アーベル”

鷺津マテリアル社製の “イブ” の設計・解析結果をベースに、桐生医師が発案したデイザリア・テック製のマイクロチップ。

視神経より脳内に侵入し脳幹に自立接続する。極度のストレスに見舞われた際に、セロトニン神経を活性化しノルアドレナリンやドーパミンを抑制する機能を有する。結

果として前頭前野の回路回復、高次認知機能の維持を促し、ストレス対処能力が向上する。

高コストにつき、使用は特級任務時における主力要員のみ限定しており、また人道的見地から時限停止機能を有する。

達郎の使用チップは治療特化型のため、時限停止機能は実装されていない。また、本人の病状に合わせて、神経制御の出力特性にも繊細なチューニングが施されている。

【時系列】

2081年06月02日（月）

聖修学園・潜入任務開始

・※秋山達郎：15歳

・※水城ゆきかぜ：16歳

・※秋山凜子：18歳

2081年07月22日（火）

ゆきかぜ・第1子妊娠

聖修学園・潜入任務失敗

2082年01月22日（木）

聖修学園・第一次強襲作戦失敗

2082年04月24日(金)

ゆきかぜ・第1子出産

2082年08月02日(日)

ゆきかぜ・第2子妊娠

2082年10月11日(日)

聖修学園・第二次強襲作戦成功

2082年10月14日(水)

ゆきかぜ・第2子中絶

2082年11月08日(日)

ゆきかぜ・病院を退院

2082年11月12日(木)

ゆきかぜ・原隊復帰

2082年11月13日(金)

達郎・病院に緊急入院

2082年12月19日(土)

達郎・病院を退院

2083年01月16日(土)

達郎・学園を中退し里を出奔

2083年02月01日(月)

達郎・消防士見習いとして仮採用

2084年04月02日(月)

達郎・消防士として正式採用

▪ 秋山達郎：18歳

▪ 水城ゆきかぜ：18歳

▪ 秋山凜子：20歳

Main story

第1話 招かれざるもの

〔2086年12月17日（火）06:30 某市立公園〕

（私の知っている達郎は、もういないんだね…）

達郎は、もう四年近く前の出来事にも関わらず、脳裏に残り続けるゆきかぜの別れの言葉を思い返す。当初は酷く落ち込んだものだが、今はもうそれほど気落ちすることもない。

（実際、ゆきかぜの言う通りになったしな）

達郎は里を飛び出して以降、ここ東北の地方都市で消防士見習いとして懸命に働き、二年半前からは正式な消防士として、地に足のついた生活を送っていた。

紫先生の勧めるままに始めた仕事だが、風遁を扱う達郎にとっては相性の良い職業だった。

- ・ 風に乗った要救助者の声を聞き、居場所を察知する
- ・ 風を操って炎の進行を抑え、火災家屋の侵入路を確保する
- ・ 風向きをいち早く予測し、近隣家屋の延焼を防止する

消火能力に限れば水遁に遠く及ばないものの、同僚に遁術の使用を見咎められる可能性が低い点においても風遁は有用であり、日々の職務をこなす上での大きな力となっていた。

(こんな半端な遁術でも役に立つなんて……って、当時は目から鱗だったな)

初冬が終わり早朝の風は冷たく、今日は空も厚い雲で覆われていた。

(雨の予報ではなかったはずだけど……夜遅くに降り出すかもしれないな)

黒色のジャージ姿の達郎は、住居近くの公園で日課のランニングと逸刀流剣術の型稽古を終え、クールダウンのためのストレッチを行っていた。

(今更对魔忍に未練はないけど、型稽古は身体に染み付いちちゃってるからなあ……まあ、知ってる人に見られなければ問題ないかな……っと)

ストレッチを終えた達郎は、住居のアパートへと足を向けた。家に着いた後はシャワーを浴びてから軽い朝食を取り、出勤の身支度を整えるだけだ。

里を離れてからの四年間、今年で二十一歳となる達郎は一度も笑うことがなかった。

【同日 23:10 都心部某ビジネスホテル】

緊急出勤の指令を受けたのはおよそ三十分前。達郎が丁度仮眠を取ろうとしていた時だった。

通報では、十二階建てビジネスホテルの六階付近より火災が発生したとのことだったが、現地に到着した頃には、既に八階付近にまで火の手が回っていた。

(これは、救助機動部隊の増援が必要では…)

黒煙の立ち上る^{のほ}ビジネスホテルの周囲には、消防車が次々と到着し火災の鎮圧に乗り出していた。

また、火元と思しき六階より階下では、先に到着していた救助隊が宿泊客の避難誘導に当たっていた。

小隊長より火元上階の救助活動を命じられた達郎の部隊の他三部隊は、即座に行動に移り非常階段を一気に駆け上がる。

達郎の部隊は担当の八階に到達すると他の部隊と別れ、非常出入口よりホテル内に侵入し要救助者の捜索を開始した。

廊下の火の粉は既に天井近くにまで達している。すぐさま達郎は脱出経路を確保するべく風遁の使用を決断した。

「…逸刀流忍術 『烈風炎操』」

同僚に気付かれぬよう発動したその遁術は、風を起こし天井への延焼を一時的に食い止めることに成功した。

更に廊下の奥へと進む達郎。やがて突き当たりの角を曲がると、達郎の視界に母親と

娘らしき二人組がうつ伏せに倒れている姿が入った。

「大丈夫ですか！聞こえますか！しっかりしてください!!」

「…うう」

金色の髪にダークレッドのジャケットとミニスカートのスーツ姿の母親は、達郎の声に僅かな反応を返した。

安堵した達郎は、続けて娘の方を確認する。歳の頃は三、四歳だろうか。上下パジャマ姿だが右脇腹の辺りが黒く焼け焦げており、火傷を負っている可能性が高そうだ。

達郎は二人が一酸化炭素中毒を引き起こさぬよう、風の防御結界を周囲に展開した。その時、意識を取り戻した母親が首を回し達郎の方を見上げた。

「う…うえ、た、達郎くん?」

「そんな、まさか…」

彼女こそ聖修学園潜入任務の折、対魔忍を裏切り達郎を罠に嵌めた張本人。高坂静流その人だった。

【2086年12月18日（水） 16:20 某市立病院】

ビジネスホテル火災の翌日。徹夜で救助活動に当たっていた達郎は、その後家には帰らずに消防士の活動服姿のまま、静流の入院先の病院を訪れていた。

疲労と眠気による倦怠感が身体を包むも何とか病室まで辿り着くと、ベッドで上半身を起こしていた静流が満面の笑みで達郎を出迎えた。

静流の衣類は室内隅のハンガーに掛けられており、今は白地のシャツのみの姿だった。はだけた胸元の隙間からは、細身の身体には不釣り合いな豊満なバストが遠目にも見て取れた。

「お久しぶりね、達郎くん。それにしても…うふふ、まさか対魔忍を辞めて消防士さんをしているなんてね」・

達郎は直ぐには返事を返さず、静流に近づくとベッド脇の丸椅子に腰を下ろした。

「まったく…誰のせいだと思ってるんだ。そっちこそ、火災如きで逃げ遅れるなんて。墮落して腕が鈍ったんじゃないのか？」

「あれれ、一丁前に男らしい口調になっちゃって。でも、達郎くんの言う通りかも。最近じゃ遁術を使う機会も滅多にないのよね。昨夜はホテルのバーで飲み過ぎちゃったのがマズかったかも…気付いた時にはもう火の海って感じだったわ」

静流は達郎の問いにそう答えると、自嘲気味に笑った。

「一緒にいた静流…さんの娘は、まだICU（集中治療室）にいるから、心配なら後で会いに行くといい。ただ、右脇腹に大きな火傷を負っていて…おそらく跡が残ると思うからそのつもりでいてくれ」

「あれだけ酷い目に合わせたのに、〃さん 〃付けでまだ私を呼んでくれるなんて。達郎くんは相変わらずお人好しね。けれど…」

静流は次の言葉をじっと待つ達郎に大声を上げた。

「あの子、私の娘じゃないからっ!!」

「……あ、そう…なんだ」

その後、二人は互いのこれまでのことを語り合った。

達郎は里を離れ四年余り、今は消防士として働いていること。対魔忍を辞めたことやゆきかぜへの愚行を考えれば、静流を憎み罰する資格が自分にはないことを…

静流もまた森田の死後、主人を裏切り逃走したことで組織内の風当たりが強くなり、今は下級のパトロンの下で食い繋いでいることを…

「この街に来たのもそのパトロンの命令だね。あの子を淑女（奴隷淑女）の養成施設に送り届ける途中だったの」

「まだ年端も行かない子を、そんな施設に…」

「幼いから良いんじゃない?」

「……」

「けれど、火傷で傷物になっちゃったみたいだから、あの子はもう無理ね…施設に送り届けても破棄されるか、下級妖魔の慰み者にされるでしょうね。ま、私も帰ってお仕置き

されるのは御免だから。しばらく身を隠して、それからまた別な主人を探すわ」

他愛もないことを話すかのように淡々と酷薄な事実を語る静流。達郎は思い悩んだ末に静流にある提案をした。

「静流さんが良ければ、あの子と一緒に対魔忍軍の保護を受けてはどうだろうか？こうして話している限り、静流さんはそれなりに自我を保っているように俺には思える。対魔忍軍の保護下に入れば、静流さんの脳にあるマイクロチップの除去も可能なはずだ。上手く行けば、元通りの生活にだって戻れるかもしれない」

静流は達郎の提案に目を見開き驚くも、優しく微笑み返すとその提案を丁重に断つた。

「ありがとう達郎くん。でも、その申し出は気持ちだけ頂いておくわ。実はね私、前々から対魔忍のお仕事が苦手だったの。だって、命をかけて幾ら戦っても終わりがないもの。だったら、快楽に溺れて毎日楽しく過ごした方がまだマシでしょう？」

黙り続ける達郎に、静流は更に言葉を重ねる。

「だから、私は今夜にでもここを出るわ。あの子は面倒を見る義理もないし、児童養護施設にでも入れて頂戴……ってそうか、それじゃ昔の私と一緒にね……あんまり良い場所じゃないわ」

「そうね、達郎くんがあの子の面倒を見たらどうかしら。ねえ、お人好しの消防士さん

「？」

「馬鹿なことを……とてもじゃないが無理だ。ちゃんと育てられるとは思えないな」

一通り話しを終え、やはり静流とは相容れないと感じた達郎は、席を立ち静流に別れの言葉を告げた。

「もう二度と会うことはないのだろうね。けれどまあ……会えて良かった。どうか達者で」

病室を出ようとドアへと向かう達郎の背中に、今度は静流が語りかけてきた。

「本当にいい男になったのね、達郎くんは。もう、最後まで黙っているつもりだったけど、我慢できなくなったから言っちゃうわね」

「一体何を……」

「あの子は……ゆきかぜの娘よ」

「……っな!？」

足を止め静流の方を振り返る達郎。その事實は自分の耳を疑うほどであったが、静流の表情を見る限り嘘を言っているようには思えなかった。

「……あの子の名前は？」

「結生……森田 結生よ」

静流は動揺し絶望する達郎を愉悦の着に、今にも達しそうな身体を妖艶にくねらせる

と、右手で髪の毛をかき上げその淫靡な表情を…淫魔に与^{くみ}する淑女の顔を達郎に晒したのだった。

【2086年12月22日（日） 10:30 某市立病院】

達郎に話した通り、静流は翌日には結生を残し病室から失踪していた。非番日の午前、達郎はICU（集中治療室）から一般病棟に移った結生の病室を訪れていた。

病室の窓から雪の振る街並みが見える。達郎はベッドに横になりじつと真上を見つめている少女に目を向けた。

肌色こそ年中日焼けしていたゆきかぜと違うものの、よくよく見れば幼いながら母親の面影のある顔つきをしていた。

問題なのは…先程から無機質な表情を浮かべ、人形のように全く動かないその有り様だ。達郎が病室に来た時も一切微動だにしなかった。

生まれてこの方、ちゃんと養育されていたようにはとても思えない。達郎は意を決し努めて優しく結生に話しかけた。

「こんにちは結生ちゃん。俺は達郎、秋山達郎っていうんだ」

「…」

「俺はこの街の消防署で働いててね。火事が起きたら火を消したり、人を助けたりする

お仕事をしてるんだけど、結生ちゃんは知ってるかな？その…大きな赤いトラックのよ
うな車に乗ってる人達なんだけど」

「…知ってる」

結生は天井に顔を向けたまま呟くように返事をした。

「そう、結生ちゃんは物知りだね。実は俺が火事に巻き込まれた結生ちゃんのことを助
けたんだよ。脇腹の火傷の具合はどうか、まだ痛む？」

「…よく…分から…ない」

やはり結生は達郎の方を見ようともしない。

(こんな子を施設に入れて本当に大丈夫なのか…いや、心配だろこれ)

この娘だけでも対魔忍軍に保護してもらおうべきではと一瞬考えた達郎だったが、結局
一般の施設に入るには変わりないだろうとすぐにその考えを改めた。

(第一、もしこの子の出自がバレたら、今のゆきかぜの幸せを壊すことにもなりかねな
い)

(やっぱり、これしか…俺しかないのか)

達郎は覚悟を決めて結生に語りかけた。

「実は結生ちゃんと一緒にいたお姉さんはもう何処かに行っちゃってね。で、もし良かったら
ならなんだけど俺が里親に…じゃなくて、しばらく俺と一緒に暮らさないかな。俺は一

人暮らしなんだけど、結生ちゃんが今までより子供らしくいられるよう努力はするつもりだから。それに……あ」

思わず言い淀んだのは、結生が達郎の方に顔を向けてくれたから。実を言えば静流から話を聞いた時に、達郎の腹はほぼ決まっていた。

既に里親となるための登録手続きを進めており、また、2年半前に消防士昇進の報告をしたきりの紫先生に連絡を取り、関係各所への少々強引な根回しをお願いしたりもしていた。

(で、後は本人の意思確認だったんだが……)

当の結生は幾ら待てども返事を返さず、ただ達郎を見つめるばかり。結局、達郎の方も品定めでもされているような気分になり、居住まいを正して結生の返事を待つ他なく……

ようやく結生が頷き承諾の意を示したのは、それから更に数分後のことだった。

(この子は……絶対大変だ……)

想像を超える結生の手強さに、今後のことを思い頭を悩ませる達郎だった。

第2話 二度目の誓い

〔2008年3月27日（日） 8：50 達郎アパート宅〕

春らしい暖かな日差しを感じる休日の朝。達郎と結生^{ゆき}は卒園式の支度に追われていた。達郎は着慣れないスーツに四苦八苦しつつ、里親として結生と暮らし始めてからの二年余りを思い返していた。

達郎は同居を始めてすぐ、保育園に結生を途中入園させた。消防士という職業柄、休日が一定せず、また夜勤で丸一日家を留守にすることも多い。なるべく、結生を一人で家にいさせないようにと考えてのことだった。

それでも、保育園にのみ頼るわけにもいかず、結局は養護施設に一時預りをお願いしたり、過干渉気味の大家さんにたまに面倒をみてもらったり：終いには一緒に消防署で寝泊まりしたこともあった。

来月からは小学生だが、基本的な生活はこれまでとあまり変わらない。下校時には家には直接戻らず、公共の児童施設に夜遅くまで預かってもらう手続きを済ませている。

そんな、不自由な片親との同居にも関わらず、結生は文句の一つも言わずに達郎のそばにいてくれた。達郎もまた寸暇を惜しまず、結生から片時も離れないようにと心がけ

てきた。

スーパーに行くにも、公園に行くにも、家事をするにも……何事においても二人は一緒にいる時間を大切にしたい。

もうすぐ七歳の誕生日を向かえる結生は、以前に比べて感情を露あつわにすることも増え、稀に見せる笑顔は何物にも変え難く達郎の心を温めた。

来月、達郎は消防副士長に昇進する。そうなれば、結生と一緒にいられる時間も、もう少し増えるのではとも期待していた。

「達郎、そろそろ出発の時間」

結生が着替えを終えて、洗面所から達郎のいる居間に戻ってきた。

「ああ、そうだな」

前髪多めのショートボブの髪型に、落ち着きある紺色のセーラーワンピースとキュロットを合わせた、子供らしさを残したフォーマルな服装だ。

「とても良く似合ってるよ、結生」

「達郎、親バカ？」

悪態をつくも顔を赤らめ恥ずかしがる結生。

（親バカなんて、何処でそんな言葉を……）

慣れないスーツに着心地の悪さを感じつつ、何とかネクタイを締め終えた達郎。今日

の達郎は、差し詰めお姫さまをエスコートする冴えない執事といったところだろう。

「ピンポーン…」

室内に響く玄関のチャイム。休日の朝、それも卒園式の当日に來客とは。心の中で悪態を吐きながら鍵を解除しドアを開けると…そこには見慣れない女性が立っていた。

「……元氣そうだな、達郎」

「え…姉…さん？」

達郎は一見して凜子だとすぐには分からなかった。凜子の姿は、ホワイトのタートルネックセーターに、ネイビーウオッシュユのスキニーデニムのボトム。その上にグレーベージュのトレンチコートを着崩して羽織っていた。

達郎の知るかつての凜子とは、あまりにかけ離れた都会的な装いだ。

そして何より…あれほど長く綺麗だったロングヘアが、コンパクトなシルエットのショートヘアに変わっていた。

達郎は、歳を経てその美しさに凄みが増しただけでなく、何処となく影のある雰囲気に加わり、ミステリアスで神秘的にも感じられる凜子の姿にしばし言葉を失った。

「前々から、紫殿に住所は聞いてはいたのだが…六年振りになるか。済まない、会いに来るまで随分と時間が掛かってしまった」

「姉さんは何も…俺の方が勝手に里を飛び出したんだから…」

そうしてまた黙り込み、時間を無為に費やす二人に業を煮やしたのか、結生が達郎の背中から顔を出し不満の声を漏らした。

「達郎、時間…」

達郎が腕時計を確認すると、時刻は既に九時を回っていた。

「う、確かにそろそろ出発しないとまずいな」

「ああ、出掛ける用事があったのか。ならば改めて出直そう。私のことは気にせず、先に用事を済ませてくるといい」

達郎は少し考え込んだかと思うと、凜子にある提案を告げた。

「姉さん、今日はこれからこの子の卒園式でね。積もる話もあるし、できれば一緒に付いて来てくれると助かるんだけど」

「…え、私が…卒園式に？」

「そう、迷惑じゃなければ」

「あ…ああ、そうだな…」

実のところ、凜子もまた達郎と会うのにかなりの勇氣と緊張を強いられていた。ゆえに凜子は、予想だにできなかったこの展開には流石に戸惑いを隠しきれず、曖昧な返事を返す他なかったのだった。

【同日 9:15 保育園道中】

達郎と凜子は前を歩く結生の背中を眺めつつ、保育園へと歩みを進めていた。

「紫殿から達郎が里親になったと聞いていたが…ではあの子がその？」

「ああ、名前は結生。二年ちよつと前に起きた火災に巻き込まれてね。身寄りがなかったから、俺が引き取ることにしたんだ」

達郎は静流のことを敢えて言う必要はないと判断し、当り障りのない内容を凜子に語った。

「最初に話しを聞いた時は驚き心配もしたが、そうか…どうやら良い親代りのようだな、達郎は」

「どうだろうね…仕事で家を留守にすることも多いから、結生には寂しい思いをさせてばかりだよ」

（達郎は里を出てから、精一杯頑張ってきたのだろうな）

一般人にしては精悍な顔付きと、スーツの上からでも分かる引き締まった身体は、消防士として命懸けの現場で日々働いているからだろうか。

他の対魔忍と比べても遜色のないその成長振りに、凜子は達郎に気取られぬよう俯くと、満足そうに一人微笑んだ。

しかし、喜んでばかりもいられない。凜子がここに来たのは、達郎に用向きがあつて

のことだ。凜子は気持ちを切替えると達郎に語りかけた。

「ところでな、達郎。その……ゆきかぜが結婚するそうだな」

達郎は驚き立ち止まるも、呼吸を整えるとすぐに落ち着いた様子を見せた。

「そうか……で、式はいつ頃？」

「再来月だ。達郎の分の招待状も屋敷に届いていたのでな。今の達郎なら或いはと思つて直接渡しに来たのだ」

（こんな理由にでもかこつけなければ、お前に会いになど……来れはしなかったがな）

達郎は凜子から手渡された招待状を開き中身を確認した。新郎の名は、達郎も良く知るかつての同級生だった。

（気配り上手なあいつのことだ。大方、ゆきかぜを説得して俺の分も用意してくれたのだろう……でも、済まない。気持ちだけ有り難く頂戴するよ）

達郎は招待状をスーツの内ポケットに仕舞うと、前に行く結生に追いつくべく再び歩き始めた。

「気を使つてくれてありがとう、姉さん。けれど式は遠慮しておくよ。俺には二人を祝う資格がないし、謝罪するにも遅過ぎた。今もゆきかぜの幸せを誰よりも願っているつもりだけど、それはもう……伝える必要のないことだから」

「……分かった。達郎がそう決めたのなら、私からはこれ以上何も言うまい」

(だって、そうだろう達郎。かつてお前を見捨てた私に、今更何が言えるというのだ…) 凜子は、内心ではこれを機会に、達郎がゆきかぜと和解し里に戻ってくることを期待していた。

だが、それがどれほど浅はかな夢だったことか…凜子はその事実を改めて今、思い知らされたのだった。

【同日 10:50 保育園・園庭】

十時から始まった卒園式は一時間程で終わる予定だったが、来賓席のスペースが手狭だったこともあり、凜子は達郎より一足先に外に出て、今は園庭の端に用意された喫煙スペースの前にいた。

吸い終わった一本目を吸い殻入れに捨て、二本目の煙草に火を付けると、こちらに向かってくる達郎の姿が目に入った。どうやら式が終わったようだ。

「まさか、あの真面目な姉さんが煙草を吸うなんて…全く想像してなかったよ」
煙草を吸うようになったきつかけは…何となくとしか言えない凜子であった。

(達郎がいなくなり、ゆきかぜも任務のない日は彼と過ごすことが多くなって、一人で過ごす時間が増えたからかもしかもしれないが…まあ、吸い始めなんてそんなものだろう)

「それに、髪型もすっかり変わってるのには驚いた。正直、すぐに姉さんだとは気付かな

かったよ」

（髪型だって、数年前に長い髪が鬱陶しく感じるようになって…それからはずっとこんなものだ）

達郎が里を離れてからというもの、姉として気丈に振舞う必要のなくなった凜子は、その後も過酷な任務を遂行し続けた。

心身疲れ果て家路に着こうとも、屋敷に大切に思っていた家人の姿はなく、心から癒やされることのない日々。

そうした状況の変化が、以前の規律を重んじる清廉潔白な凜子の性格に、少なからず影響を与えていた。

「まあ、私にも色々あったのさ」

「ふくん。けどまあ、消防士の俺から言わせて貰えば、吸いがらの後始末だけは注意しなよ。特に寝ながらは絶対ダメだから。里の屋敷って木造だし」

「ぶつ、（こほ）こほつ…あー」

子供を諭すかのように語る達郎に、言い返そうとするも思わず咳き込んでしまった凜子。

「達郎…私はそんなにだらしなくはないぞ」

「本当かな、姉さん変なところで抜けてるから」

そう言うのと達郎は、屈託のない笑顔を凜子に向けた。

(ああ、久しく忘れていた…そう、この空気感だ)

達郎の口調は「凜子姉」から「姉さん」へ変わったようだが、根っこの部分は変わらずにいてくれたようだ。それが凜子には堪らなく嬉しく感じられた。

凜子が二本目の煙草を吸い終わると、二人は園庭の中央で他の親御さん共々、子供達が外に出てくるのを待った。

しばらくして、凜子が玄関前に出てきた子供達の集団の中に結生の姿を見つけると、隣りにいた達郎が呟いた。

「ゆ……なんだ」

「ん、どうした達郎。よく聞こえなかったぞ」

「結生は……ゆきかぜの子なんだ、姉さん」

「…?!」

凜子が驚き左側に立つ達郎の方を向くと、その両目には大量の涙が溢れていた。

つい今しがたまでは、達郎も凜子に結生の出自を明かすつもりなど毛頭無かった。

だが、結生の姿を目にした途端、胸に込み上げてきた思いと溢れる涙を抑えられなかった。

後悔の果てに辿り着いたこの場所で…今一度誓いを立てる自分を凜子に知って欲し

かった。

「でも…勘違いしないで欲しいんだ、姉さん」

「結生がいたから頑張れた…笑えるようになった」

「結生は俺に…もう一度チャンスをくれたんだ」

「俺は、今度こそ結生を守る強い男になるよ」

その言葉を聞いた瞬間、凜子の脳裏に在りし日の達郎の姿と誓いが蘇る。

『…俺は、ゆきかぜを守る強い男になるんだ』

(ようやく、ここから…また始められるんだな達郎)

(まったく、世話の焼ける泣き虫な弟だ…)

凜子は左手で達郎の右手をそつと包むと、達郎と同じく結生の方に顔を向け呟いた。

「その達郎の誓い、私にも手伝わせてくれないか」

「……………ううう…」

達郎は凜子の言葉に感じ入り俯くと、凜子の手を強く握り返しそれに答えた。

(私はもう二度とこの手を離さない…絶対だ)

こちらに気付き駆け寄ってくる結生。その顔に卒園の喜びは見え、達郎の様子に気付いたのか、心配そうな表情を浮かべていた。

(なんだ、やっぱり良い親代りだったんじゃないか)

凜子は達郎と繋いだ手は離さずに、半歩前に出ると膝を曲げ前屈みになり、笑顔で結生を出迎えたのだった。

〔2008年3月28日（月） 19：40 対魔忍基地・ブリーフィングルーム〕

今夜の任務の説明を聞き終えると、凜子は部屋を出ようしていたゆきかぜを呼び止めた。

凜子は達郎に会えたこと、それと達郎は結婚式を欠席する旨をゆきかぜに伝えた。無論、結生のことは伏せた上でだ。

「そっか残念。だけどまあ、生きててくれて安心したわ。正直、酷い別れ方をしたから後味が悪かったんだけど…おかげで少し気が晴れたかも。ありがとう凜子先輩」

それほど動揺した様子もなく、凜子の話に淡々と返事を返したゆきかぜは、余程興味が無いのか特に達郎のことを尋ねることもなく部屋を後にした。

片や凜子の方は、その背中を静かに見送るも、ゆきかぜの余りにも薄情な仕打ちに、両拳を強く握り昂る感情を抑えるのに必死だった。

（これが、達郎がゆきかぜの幸せを願って選んだ道…）

（私にはとても耐えられそうにない…）

それから数週間後、凜子はゆきかぜにコンビの解消を告げた。再三に渡りゆきかぜに

理由を尋ねられた凜子であったが、その意思は固く、またその本心を決して語ることもなかった。

第3話 続く想い、終る誓い

〔2095年4月1日（月） 8：40 達郎マンション自宅〕

暖かな春の日の続く朝。今日の天気予報は午前中は快晴、夕方から少し曇り出すようだった。月日は瞬く間に過ぎ、今日から結生ゆきももう中学生だ。

達郎と結生は、五年前に手狭だったアパートを引き払い、駅近くの八階建て賃貸マンションの六階に引越していた。

3LDKの間取りの新たな住居は、結生の部屋と凧子用の客間を用意するに、十分余裕のある広さを備えていた。

特に凧子用の客間の用意は、当時の達郎にとって喫緊の課題であった。

結生が小学校に入学してからというもの、凧子は大体月に一度のペースで訪れては、駅近くのホテルに度々宿泊しており、それを申し訳なく感じていたからだ。

それにしても：凧子が家に訪れる頻度は、達郎から見ても度を越えていると言わざるを得なかった。誕生日や正月、クリスマスといった、節目やイベントの日には必ず現れるのだ。

挙げ句の果てに、凧子自身の誕生日には、達郎から声を掛けねば凧子の方が拗ねてし

もう始末だ。

二年程前からは電車の時刻表に縛られるのを嫌がつてか、車を運転して来ることも多い。長距離運転は事故が心配なので、できれば止めて欲しい達郎だった。

そして今回、昨夜遅くに達郎宅を訪れ前泊した凜子が、結生の晴れ舞台に持ち込んだ服装は……何と着物だった。

薄紫の生地に施された草花の刺繍は上品で落ち着きがあり、凜子の女性らしさを更に際立たせていた。

他方、今日の主役の結生は、紺系のブレザーにチェックのプリーツスカート、胸元には小振りな赤いリボンが愛らしい学生服姿だ。

陶器のように白い肌に、艶やかな栗毛色のストレートロングヘア。年々、ゆきかぜに似る勝ち気ながらも茶目っ気のあるその顔つきは、親の鼻^{ひいきめ}貞目を差し引いても、美少女というて差し支えないものだった。

十時開始の入学式までにはまだ少し時間がある。準備を終えた三人は出発までの間、各々くつろぐことに決めた。

スーツ姿の達郎はコーヒーを片手にリビングのソファに腰を下ろし、結生は持ち物の確認のため自室に戻って行った。着物姿の凜子は、キツチンの換気扇の下で煙草に火を付けようとしている。

小学校に入学してからの結生は、同級生や凜子の影響もあって、以前の遠慮がちで控え目だった性格から、物怖じしない朗らかな子へと徐々に変わっていった。

とりわけ凜子が来た時は、近くにべったりで本当に離れない。凜子の話を聞く限り、最近少年時代の達郎のことをしきりに聞きたがるようだ。

ちなみに、結生には凜子が対魔忍であることは明かしていない。守秘義務ゆえに詳細は教えられないが、刑事の真似事のような仕事をしているとだけ伝えてある。

幸いにも、凜子の大ファンである結生にとつては、それすらも高評価の材料にしかならなかったようだ。

「そういうえば達郎。話し忘れていたが、実は後方勤務への異動願いを出していてな。今はまだ抱えている任務があるので、すぐには無理だが…希望が叶えば、今よりも頻繁にこつちに顔が出せると思う」

(…え、今ですら月に一度のペースで来てるのに…もしかして、隔週とかになっちゃうの?)

達郎はキッチンカウンター越しに話しかけてきた凜子に、慌てて返事を返した。

「いやいや、姉さんは今も重要な主戦力だろうに。俺や結生のために何もそこまでしなくても…」

「何を言っている達郎、中学生にもなった年頃の女の子に、男親一人では結生も心許なか

ろう。私がより手厚く面倒をみなくてどうするのだ」

「あ、はい……」

「それに、私もそろそろ良い年齢だ。忍びの技に衰えの見えぬ内に、前線を退き後進の指導に当たるのも悪くならう」

「年齢って……姉さんは老け込むにはまだ早いでしょうが」

「む、随分と盾突くではないか……大体だな、達郎にしつかり者の嫁でもいれば、私がまめに顔を出す必要もないのだぞ。そう言う意味では達郎のせいでもあるな」

「いや、それを言うなら姉さんの方でしょ。今日だってそんなに綺麗なんだから、さっさと行き遅れない内にだな……あ」

「ほう……今、私を綺麗だと言ったな？さて、それは果たしてどのくらいだ？」

「……う、どのくらいって言われても」

「……」

「それは……今までで……一番……多分……」

達郎はベランダの方に目を向けつつ、焦りながらも何とか片言の返事を凜子に返した。達郎は見えていなかったが、凜子の方もまた、顔を耳まで真っ赤にして恥入っていた。

「はい、達郎も凜子さんもそこまでーっ！」

結生が自室のドアを勢いよく開きリビングに飛び込んできた。そのセリフとタイミ

ングは、間違いなく二人の会話に聞き耳を立てていたに違いなかった。

「よくもまあ、毎回二人とも飽きもせず甘々な展開を…凜子さんも達郎を困らせるのはやめてくださいっ！」

（何たる失態。達郎と凜子さんを二人きりにするなんて。どうやら、入学式だからって気が緩んでいたようね…）

「ま、待て結生、お前は何か勘違いを…」

「達郎は黙ってて！」

「は、はいっ」

「そもそも、凜子さんは達郎のお姉さんなんですよね？どんなに好き合っても結婚は無理ですから。ま、その点、私にとって達郎はあくまで里親で、血縁関係ありませんから。そう…私と達郎に法的な障害は一切ありません！ついでに言えば、年の差も全く気にしてませんので心配無用ですっ!!」

一氣にまくし立てた結生に対し、凜子は腹を抱え笑いを抑えようと必死だ。

「くっ、くく…」

「何がおかしいんですか、凜子さん？」

「ああ、いや済まない。結生があまりにも可愛らしくてな。けどいいのか結生。その履いている靴下…小学生の頃のやつじゃないのか？」

「……えっ……嘘」

結生は自分の過ちに気付くと、顔を真っ赤にして脱兎の如く自室へと消えた。思わず顔を見合わせて笑う達郎と凜子。おそらく、考えたことは同じに違いない。

『まるで、ゆきかぜと一緒にいるみたいだ』

「…今幸せか、達郎?」

(分かかって聞いてくる…姉さんも本当に人が悪い)

「勿論だよ。姉さんと結生がいてくれるなら、この先ももう…きつと幸せしかない」

凜子は達郎の返事に満足そうな表情を浮かべると、二本目の煙草に火を付けた。そしてまた達郎も、片手に持っていたコーヒーを口にしたのだった。

【2095年4月10日(日) 13:20 ゆきかぜ自宅】

同級生の彼と結婚した後、郊外に新居を構えたゆきかぜは、4歳になる長男の通う幼稚園のママ友さん達を自宅に招き、ささやかなホームパーティを開いていた。

モノトーンを基調とした2階建てのデザインナース住宅の庭を、元気に走り回る年中クラスの子供達と、それを横目に1階のリビングで昼食後のお茶を楽しむママ友さん達。

キツチンで昼食の後片付けをしているゆきかぜは、ホワイトのシャツにデニムのワイドパンツという動きやすいカジュアルな装いだ。

今のゆきかぜは、ボーイッシュなショートヘアも相まって、快活な印象と母親相応の柔らかな雰囲気の両方を合わせ持っていた。その容姿から幼稚園での人気もとても高いのだが、本人自身はそのことを多少億劫にも感じていた。

結婚後も最前線で活躍を続けるゆきかぜ夫婦は、任務のために家を留守にすることが多く、長男を彼の実家に預けることも少なくなかった。

三日前に任務を終えて彼より一足先に帰宅したゆきかぜは、週末は長男と二人でゆっくり過ごすつもりだったのだが：押し強いママ友さん達の勢いに負けた結果がこの有り様だった。

(まあ、いつか。あの子も楽しそうだし)

ゆきかぜの長男は、四歳にして既に風遁使いの片鱗を見せていた。将来、対魔忍となるならば前線での任務は荷が重いかもしれない。

故に、^{ゆえ}それを引け目に思ったりしない、前向きな子に育てていこうと彼とも話し合っていた。

任務での疲れが溜まっていたのか、何とはなしに手元から視線を外したゆきかぜは、うっかり手を滑らせ皿を床に落としてしまった。

皿の割れる音に驚くママ友さん達に、ゆきかぜは大丈夫と一声掛け、割れた皿の破片を一つずつ拾い集め始めた。

「ママ、大丈夫？」

庭で遊んでいた長男が母を心配したのか、ゆきかぜの近くに寄って来た。

「大丈夫、心配ないわ。ちよつと手が滑つちやつただけだから」

それでも心配を拭えなかつた長男は、何とか母を元氣付けようと父との約束を語り出した。

「ママのことは、僕の風遁で守ってあげるからね。そのためにも、パパと強くなるつて約束したんだ！」

「……ぐはっ！」

瞬間、ゆきかぜは後頭部をハンマーで思い切り叩かれたような激痛を感じ、右手で頭を押さえた。

（風遁……私を……守る？）

ゆきかぜは達郎の誓いを忘れていた訳ではなかつた。ただ、今となつては他愛のない思い出の一つに過ぎないと、記憶の片隅に捨て置いていた。

だが、長男の言葉を切つ掛けに、意図せず色を帯び蘇つたその思い出は、かつての自分の気持ち呼び起こすには十分であり……また、記憶の改竄・忘却の暗示に綻びを生むに、余りある鋭さを備えていた。

もはや、ゆきかぜの目に長男の姿は映っていない。今、眼の前に浮かぶのは在りし日

の達郎の姿だ。

『…ゆきかぜのことは俺が必ず守るから』

「うあ、あああ…あああああ！」

ゆきかぜは、突如悲鳴を上げ崩れるように倒れ込むと、両手で頭を強く押さえながら苦しみがき、皿の破片も気にせず床の上を転げ回った。

暗示の解けたゆきかぜの脳内に、聖修学園での陰惨な記憶が怒涛のように襲いかかる。

ゆきかぜの脳裏に浮かぶは、森田専属の淑女として性的快楽を際限なく追い求めた汚らわしい自分。

森田との間に娘まで産んだ痛ましい自分。

対魔忍への復帰を優先し、第二子の中絶を決めた冷酷な自分。

そして…事実を知りもせず、失意の達郎を汚物を見るような目で冷たく突き放した滑稽で哀れな自分。

「…あ、あが…ぐふっ、ぐふっ…ぎやあああ！」

脳内の奥底に仕舞い込まれていた数多の真実が、鮮烈な色彩カラーと強烈な現実感リアリテイを伴って、まるで機関銃マシンガンの一斉射撃のようにゆきかぜの精神ココロをぶち抜き、次々に風穴を空けていく。

鼻水と涎にまみれた顔に、虚な目からは際限なく涙が流れ続けている。ゆきかぜは寒さに震えるかのように身体を丸めると、壊れた人形のように意味不明な言葉を呟き出した。

「…え…うあ。そんな、やめ…ごめ、ろ…ごめ…な…うう…」

誰かに助けを求めようと眼球を動かし周りを探るゆきかぜ。何事かとゆきかぜの周囲に集まったママ友とその子供達は、心配そうな顔つきでゆきかぜのことを見下ろしている。

「つあ…あは…あはは…」

ゆきかぜにすれば、その様子は皆がゴミのような自分を嘲り、見下しているようにしか思えなかった。今や呼吸すら難しく意識も朦朧とする中、自らの乾いた笑い声がリビングに虚しく響き渡る。

ゆきかぜにとって、既にここは地獄と何ら変わりがなかった。

【2095年4月10日（日） 19：40 対魔忍病院】

その後、病院に緊急搬送されたゆきかぜは、ICU（集中治療室）のベッドで浅い眠りについていた。

鎮静剤の投与により一時的には落ち着いているが、今も医療用の拘束具でベッドに身

体を縛り付けられている。

早々に何らかの処置を施さなければ、更にゆきかぜの精神を追いつめることになりかねない状況だった。

ゆきかぜの周りでは、桐生医師を含む複数の医師達が、今後の処置について議論を重ねていた。

報せを聞き病院に駆けつけた凜子は、ゆきかぜには近寄らず室内の壁にもたれかかる腕を組み、医師達の様子を厳しい表情で眺めていた。

今夜の任務に備えていた凜子は、ボデイラインの際立つ紫色の対魔忍装束を着用しており、その上に作戦移動用の黒のスラックコートを羽織っていた。

ゆきかぜは記憶のフラッシュバックにより、精神機能がショック状態に陥っていた。脳幹に接続されたマイクロチップ “アーベル” を以てしても、その過大なストレスには抗いきれなかったようだ。

暗示により記憶の改竄・忘却を再び行うにしても、今後も些細な切っ掛けで度々解除されるようでは、ゆきかぜの精神的負担は指数関数的に増大するばかりで、遠からず生死に関わるのは明白だった。

ゆえに、先ずは暗示を解除するに至った根本原因を突き止めなければいけないのだが、医師達には、それがどうにも分からない様子だった。

「現場に居合わせた親達の話を書く限りでは、ゆきかぜの長男との会話が切っ掛けのようだが、こんな他愛のない言葉が一体何故……」

桐生医師達が頭を悩ませていると、それを見かねた凜子が呟いた。

「おそらく、幼少期の達郎と重なったのだろう。昔、達郎はゆきかぜに同じような約束をしていたからな」

「なるほど。では、その約束の記憶を改竄、或いは忘却することができれば、今後のリスクは相当低くなるとみて間違いないな……よし、その方針で進めよう」

「……っ、そんな……」

（何故そうなるっ、他に方法はないのか!?!）

凜子は喉まで出掛かった言葉をのみ込んだ。

「ん、何か他に問題でも?」

「……いや……ゆきかぜのこと……よろしく頼む」

「勿論だとも。ありがとう凜子君。君のおかげで、何とかゆきかぜを救うことができそうだ」

「……………」

話を終えた凜子は、桐生医師に返事を返すことなくICUを後にすると、大きく一つ息を吐きゆつくりと廊下を歩き始めた。

(ゆきかぜ…あの時、お前は忘れるべきではなかった。達郎と辛い思いを分かち合うべきだったんだ)

ゆきかぜが記憶を改竄・忘却したあの瞬間から、私達の道は2つに分かれたのだろう。互いの道はどちらも現実には違いないが、今更もう一方に擦り寄ることなど不可能なほど大きく離れてしまっていた。

ならば、せめてこれまで通りに幸せな道を歩むべきだろう…凜子は足を止めるとICUの方を振り向き呟いた。

「それが…達郎の願いでもある」

凜子は病院の玄関口へと再び歩き出す。凜子の固く冷たい靴音の響きが遠ざかるにつれ、その姿もまた廊下の暗がりに紛れ消えていったのだった。

第4話 There's No Ending

〔2095年4月10日（日） 19:50 対魔忍病院・ICU〕

桐生医師達が頭を悩ませていると、それを見かねた凜子が呟いた。

「おそらく、幼少期の達郎と重なったのだろう。昔、達郎はゆきかぜに同じような約束を
していたからな」

「なるほど。では、その約束の記憶を改竄^{かいざん}、或いは忘却することができれば、今後のリス
クは相当低くなるとみて間違いのないな…よし、その方針で進めよう」

「…っ、そんな…」

（何故そうなるっ、他に方法はないのか!?)

凜子は喉まで出掛かった言葉をのみ込んだ。

「ん、何か他に問題でも?」

「……」

・
・
・

「嫌、忘れたく…ない」

「…っ！、ゆきかぜ!？」

壁にもたれかかっていた凜子からは、医師達の背中に阻まれその姿は見えない。だが、それは確かにゆきかぜの声だった。

凜子は数歩前に進み視角を変え、医師達の隙間にゆきかぜの姿を見つめる。拘束具で身動きの取れないゆきかぜは、首を精一杯回し凜子の方へと顔を向けた。

「凜子先輩は…私の一番大切な思い出を奪っちゃうつもりなんですか?」

今のゆきかぜはこれまでの真実を知り、以前とは異なる見地で過去に相対した結果、自身の認識を大いに改めていた。

つまるところ…達郎への思いが無関心から愛情へ反転し、未だかつてないほどに彼に焦がれ、彼を渴望していたのだ。

「ゆきかぜ、お前は…」

「私、知ってるんですよ? 凜子先輩が私とコンビを解消してから、達郎に度々会いに行ってる!？」

「……」

「私、会いたい…今すぐ達郎に会いたいです」

「今更、会ってどうしようというのだ。達郎は辛い過去を乗り越えて立派に暮らしてい

る。ゆきかぜにだつて…今はもう大切な家族がいるではないか」

「分らない…けど、謝りたい。私は達郎に会つて謝りたい」

「無理だ、ゆきかぜ…そんな考えなしでは周りを傷付けるだけだ。誰も幸せにはなれない」

達郎や結生ゆきのことを第一に考えている凜子からすれば、ゆきかぜの願いは到底受入れられるものではない。

今のゆきかぜは、達郎のことだけを考えることで何とか正気を保っているのだろう。でなければ、自身に起きた陰惨な事実こころに、精神が耐えられるはずもない。

「ふ、ふふ…駄目だよ、凜子先輩。まだ達郎を独り占めにしたいんですか？私が記憶を忘れて思い違いをしていた間に、今まで散々…ずっと達郎と一緒にいたくせに!」

そも、達郎と再び会うまでに凜子は六年間を要したのだが…今のゆきかぜには何を言つても無駄だろう。凜子を睨みつけるゆきかぜの目は、嫉妬と憎悪で濁りきつてい

る。「…飲み込んでくれ、ゆきかぜ。お前が取り戻した記憶は、達郎のことだけではないだろう。今のままでは、お前はその記憶に精神こころを喰い殺されかねない」

（我ながら小賢しい返答だ…逃げていゝな、私は）

「嫌だ、会わせて…会わせて、会わせて、会わせて、会わせて、会わせてっ!」

「…ゆきかぜ」

「ああああああ!!凜子先輩、お願いだから!一度だけで良いから…達郎に会わせてよお
おお!!」

興奮状態に陥ったゆきかぜは、凜子に近づくべく身体を動かそうとするも、拘束具がそれを阻み、ベッドごと勢い良くガタガタと揺れるばかり。

もはや、取り付く島もないと判断した凜子は、桐生医師に処置をお願いする。

「…桐生先生」

桐生医師は頷くと、他の医師に用意させていた鎮静剤の投与を指示した。それに気付いたゆきかぜは怯え懸命に逃れようとする。

「ああああ、嫌!お願い、薬は打たないで!失くしちゃう…また失くしちゃうのは、絶対嫌ああああ!!」

どれほど足掻こうが、拘束具でベッドに縛り付けられている以上、逃げられるはずもなく…鎮静剤を投与されたゆきかぜは、徐々にその意識を失っていく。

「…あ…ずるい、ずるいよ凜子先輩。何で私だけ…こんな…」

数分後、ゆきかぜが静かな寝息を立て始めると、重苦しい空気の中、桐生医師が口を開いた。

「やはり、本人がこれだけ執着しているところを見ると、凜子君の見立ては正しかったよ

うだ。直ぐに暗示療法の準備を」

医師達はゆきかぜのベッドを離れ、各々準備へと向かっていった。

「凜子君もこれから任務があるのだろうか？ゆきかぜのことは私達に任せて、そろそろ行くといい。それとも…もしや、凜子君は情に流されてでもいるのかな？」

「……いや…ゆきかぜのこと…よろしく頼む」

「勿論だとも。ありがとう凜子君。君のおかげで、何とかゆきかぜを救うことができそうだ」

「……………」

話を終えた凜子は、桐生医師に返事を返すことなくICUを後にすると、大きく一つ息を吐きゆつくりと廊下を歩き始めたのだった。

【2095年4月12日（火）未明 対魔忍病院】

真夏の里、広大な田畑に青い空。青々と茂る山々の木々。幼いゆきかぜ、達郎、凜子の三人は川で水遊びに興じていた。

ゆきかぜと達郎はハーフパンツ、凜子はスキニージーンズ。三人ともトップスはTシャツという、いかにも小学生らしい服装だ。

心配顔の凜子を他所に、滑りやすい川辺の岩の上を次々に飛び移るゆきかぜと達郎。

前を行くゆきかぜに達郎はどうしても追いつけない。

遂には無理をして足を滑らせ、川底に尻餅をつき服を濡らしてしまう。

無様な達郎の姿に笑うゆきかぜ、ほら見たことかと達郎に駆け寄る凜子。

(ああ、どう考えてもこれは夢ね)

だからこそ、ゆきかぜは目一杯この刻を楽しんだ。生身の体と隔たれた夢の中だからか、ゆきかぜ自身は現実に比べ落ち着いている。

これまでの状況を全て理解していながら、不安や後悔に押し潰されてパニックに陥る様子もない。

夕暮れ時の帰り道。田畑を縫うように道を歩く三人は、いつものT字路、達郎と凜子に別れを告げるいつもの場所に到着した。

二人はまた明日と別れの言葉を口にする、背中を向けゆきかぜから離れていく…達郎と凜子が手を繋ぎ遠ざかっていく。

「…あ…あ、待って、待って達郎！」

ゆきかぜが呼び止めるも達郎に気付く様子はない。堪らず達郎達の元へ駆け寄るゆきかぜ。その姿は、いつの間にか対魔忍装束を着た大人の姿に戻っていた。

周りの里の景色が徐々に淡く白い光に消えていく。いつしかそこは、ゆきかぜと達郎の二人を残し、後は何もない真っ白な空間に変わっていた。

「お願い、待って。私、達郎に話があるの！」

ようやく、ゆきかぜの声に気付いたのか、立ち止まりこちらを振り返る幼い達郎。どうしたのと言わんばかりの顔つきだ。達郎との距離はおよそ三メートル。ゆきかぜは震える声で、達郎に話しかける。

「私…達郎を傷付けた。達郎の部屋に行った時、本当のこと知らなくて…わ、私が裏切ったのに、あんな…」

「…」

「こんなの…都合の良い夢だつて分かつてる。でも…それでも、謝らなくちゃつて。私にはそんな資格ないけど…でも…あ」

ゆきかぜの話を遮るように、達郎は首を横に振った。

「いいんだ。それは…もう済んだことだから。本当に辛かったのは、僕よりもゆきかぜの方だと思うから。だから…謝る必要なんてない」

「…あ、あ」

自分を労る達郎の優しい言葉に、ゆきかぜは口を両手で覆い咽び泣く。

「け、けど、失くしちゃう。目が覚めたら達郎のこと覚えてても、この気持ちはきつと失くしちゃうの…そんなの、嫌だ、うう、うあああ…」

両手はそのままに両膝を地面に落し、身体を丸めて泣きじやくるゆきかぜ。

しばらくして、こちらに向かつてくる足音に気付き目を開けると、ゆきかぜの近くで立ち止まったであろう達郎の両足が目に留まった。

けれど、その足は子供にしては余りに大きい。

驚いて顔を上げたゆきかぜの視線の先には、あの頃の…別れた当時の対魔忍姿の達郎がそこにいた。

青年姿の達郎は片膝を突くと、右手の親指でゆきかぜの頬の涙を優しく拭う。

「ゆきかぜは本当に分ならず屋だな。ゆきかぜの気持ちはちゃんと伝わったから。だから、もう泣くなよ」

「…あああああ、達郎、達郎っ！」

達郎に抱きつくゆきかぜ。達郎はゆきかぜが泣き止むまでの間、背中を優しくさすり続けた。

「うう…ひつく…ぐす…」

「さあ立って、ゆきかぜ。そろそろ帰らないと…俺にはできなかつたけど、彼「あいつ」ならきつと…これから先もゆきかぜのことを見守れるはずだから」

彼「との仲を知る達郎の言葉に、ゆきかぜは目を見開き、一瞬身体を強張こわばらせる。

「無理だよ…私、もう 彼に会わず顔がない。こんな淫売にこだわらなくても、彼の周りには綺麗で可愛い女の子が沢山いるもの。私は… 彼に相応しい女じゃな

かった……」

「非道いな、ゆきかぜは。そんなこと気にする奴じゃないって知ってるくせに」
「でも……」

「俺は……『あいつ』になら、ゆきかぜのこと任せてもいいかなって思えるんだ。だからさ、ゆきかぜ……俺と『あいつ』、二人のことを信じて欲しい。それじゃ駄目かな？」

「……ううん……うん、ありがとう、ぐす……ありがとう、達郎」

ゆきかぜは達郎の両腕を支えにゆっくりと立ち上がろうとするも、その途中で達郎の両足のつま先が消えかかっていることに気付いてしまう。

「達郎、足が……」

「ああ、俺の役目はここまでみたいだ。ちよつと寂しいけど……さよならだね、ゆきかぜ」
「……違うわよ、達郎」

「……？」

ゆきかぜの目は涙でまだ少し腫れているものの、その表情は自信に満ち溢れている。

「私、決めたわ。これからも頑張つて戦い抜いて、生き抜いて、いつか必ずこの想いを取り戻して……そうしたら私、『彼』と一緒に現実の貴方に会いに行くわ」

「……辛い記憶も一緒に蘇るのには？」

「今は無理でも、私はもつと強くなるし『彼』もいるんだもの。きつと耐えられるわ」

——その消失は、既に両膝下にまで及んでいる。

「えつと…現実の俺が待つているかも分からないんだけど？」

「別に待たなくてもいいわ。だって、必ず追いついてみせるもの」

——その進行は早く、腰付近にまで達している。

「強欲だな、ゆきかぜは」

「そうよ。だから、諦めなさい達郎。私、みんなと幸せにならないと気が済まないの」

——その勢いは衰えず、胸元近くに届きつつある。

「今の俺、幸せかもしれないよ？」

「なら、もつと幸せになるだけの話よね」

——遂に頭と右肩が残るのみとなった達郎は、

「また、勝手に決め付けて…そんなだから、俺は…」

——最期の言葉を言い終えることなく、跡形もなく消え去った。

(…：俺は…何よ、達郎。私の夢のくせに…最後まで締まらないなんて。本当にダサくて、トロくて…情けないんだから)

(…：うう…ぐす…：さてと、私は目覚めるまでの間どうしようかな)

目が覚めればこの夢もきつと忘れてしまうのだろう。だから、ゆきかぜは残された時間を使い、この想いを心に刻み付けることに決めた。

常に心の片隅に在って、何かの拍子に思い出せるようにと。

ゆきかぜは祈るように胸の前で両手を握り合わせると目を閉じ、目覚めるその瞬間まで……ただそれだけを一心に願い続けた。

【2095年4月13日（水） 10:20 対魔忍病院・一般病棟】

ゆきかぜが目覚めると、そこは病室のベッドの上だった。ごく普通の入院着を着せられ、窓からは明るい陽射しが差込んでいる。

全く状況が掴めないゆきかぜは、動揺の色を隠しきれない。

（……は……病院？ どういうこと、これ……）

「おはよう、ゆきかぜ……気分はどう？」

久しぶりに聞く「彼」の声。ベッド脇の丸椅子に座り、自分の左手を握る「彼」の姿を見つけ安心したゆきかぜは、その問いかけに微笑みで返事を返した。

医師にゆきかぜが目覚めたことを報告するべく、「彼」は病室を出るとしばらく戻らなかつた。どうやら、対魔忍仲間達にゆきかぜが目覚めたことを連絡していたようだった。

医師の問診と軽い検査が終わる頃、ようやく病室に戻ってきた「彼」は、ゆきかぜにこれまでの経緯を事細かく説明してくれた。

- ・ホームパーティー中に倒れて一時昏睡状態に陥っていたこと
- ・心因性の疲労が原因らしく、一ヶ月程度の休養を要すること
- ・「彼」が任務を離れ、病院を訪れたのは昨晩遅くだったこと
- ・長男は「彼」の実家に預けられていること 等々

ゆきかぜは一通り話を聞き終わると少し疲れたのか、ベッドに横になると何とはなしに「彼」のいる側とは反対の窓の方へと身体を向けた。

——窓の外には、一羽の雀が木の枝にとまっていた。

その雀は、じつと動かずにゆきかぜを見つめていた。ゆきかぜもまた、その雀から何故か目を離せない。

やがて別の雀がやって来ると、一羽目の雀は急かさされるように一緒に何処へと飛び去っていった。

(あれ…私、何で泣いてるの…)

ゆきかぜの両目から人知れず静かに流れる涙。だが、ゆきかぜはその涙を拭おうとはしなかった。

理由は皆目見当がつかなくなったが、これで良いと思えた。頬を伝うこの温かい涙の感触を忘れないことが、今はとても大切なことのように感じられた。

そうして、ゆきかぜは背後にいる「彼」を心配させぬように、その涙が乾ききるまで

窓の外を眺め続けたのだった。

【2095年5月17日（火） 22:40 高層ビル・屋上】

高層ビルが建ち並ぶ深夜の街並み。一際高くそびえる超高層ビルの屋上の一角に佇む、赤と紫の二色の月影。

果たして、それは眼下の街の灯りを見下ろすゆきかぜと、その後ろで瞑想に耽る凜子の姿であつた。

退院後の復帰任務に際し、ゆきかぜの身を案じた「彼」が味方を1名同行させるようにと言つてきかないので、それならばとゆきかぜが凜子を指名したのだ。

耳奥に仕込まれた無線機から、今夜の指揮を担当する「彼」の声が聞こえてくる。

『各員、配置に就いているな。ターゲットが予定ポイントに到着した。これより三十秒後に戦闘行動を開始する』

ゆきかぜが軽くステップを踏み身体をほぐし始めると、瞑想を終えた凜子が語りかけしてきた。

「ゆきかぜ、何故私を選んだのだ。お前ほどの手練れであれば、他に喜んで同行する者がいるだろうに」

「え、どうせ組むなら凜子先輩でないと張り合えないかなつて。どつちが先に獲物を仕

留めるのかつてね」

「吠えるな、ゆきかぜ。病み上がりには後れを取るようなら、とうの昔に刀など捨ててい
る」

『十秒前…カウントダウン』

「六年振りか…凜子先輩の空遁で跳躍するのも久し振りね」

…八

「少しは歯応えのある獲物だと嬉しいのだがな」

…六

「それは無理、私達が相手だもの」

…四

「ふ…全くその通りだ」

…二

「行くよ、凜子先輩！」

「応よー！」

…一

ゆきかぜと凜子は横並びに屋上を駆け出し、瞬く間にトップスピードへと上り詰める。
のほ

…ゼロ

屋上の柵を飛び越え空中に身を投げ出した二人は、凜子の作り出した空間跳躍の泡沫に包まれると、一瞬にして闇夜の空からその姿を消したのだった。

彼女を待ち受ける運命は、己の遁術の如く激しく過酷なものばかりだが、その歩みは誰よりも速く、また傷つくも決して退くことはないだろう。

周囲を惹きつけて止まない輝きを放ち、何れ力尽きるその瞬間まで、己が意思でひたすらに前へと突き進むに違いないその人生を、誰が咎め批判とがすることなどできようか。

彼女こそは稲妻の申し子、闇夜に猛る赤き咆哮、雷撃の対魔忍なれば。
了

Side story

結生の恋愛模様

〔2087年7月6日（日） 11：20 某商店街〕

秋山 達郎：22歳

森田 結生：5歳

達郎と結生は駅前の商店街を訪れていた。

消防士の仕事で家を留守にすることの多い達郎は、非番の日の午前中に、次の1週間分の食料品の買出しをいつもこの商店街で済ませていた。

まずはスーパーで日用品や加工食品を買い揃え、次に鮮魚店や青果店等を順に周っていく。

今時は専門店に行かずとも、大抵の物はスーパーに揃っているのだが達郎はそうはしなかった。

一人暮らしを初めた頃は勝手が分からず、里の屋敷にいた頃の使用人に倣っただけのことだった。

だが、手間は掛かるがスーパーより安く美味しい生鮮食品が入ることもあるし、

地元のコミュニティに多少なりとも貢献していると思えば、達郎にとってこの程度は苦ではなかった。

半年前からは結生との二人暮らしだが、特に時間に追い立てられている訳でもない。

一人暮らしの時と同様、ゆっくり買い物を行うだけの穏やかな時間に、達郎は僅かばかりの安らぎを感じていた。

「いらつしやい、今日もお兄さんと仲良く買い物かい？」

顔見知りの魚屋の店主が結生に声を掛ける。達郎の隣りにいた結生が軽く頷いた。

結生は未だに人見知りが激しい。頷きを返すようになっただけでも、かなり進歩したと言えるだろう。

達郎が魚屋で会計を済ませ後ろを振り向くと、結生がしきりに魚屋の看板を眺めている。

「結生はこの看板が気になるのかな？これはお店の名前でね。」

「魚島屋うおしまや」って書いてあ

るんだよ」

「…うおじやまっ？」

「ん？」

達郎は自分の聞き間違いを疑った。

（それでは、お相撲さんの名前みたいに聞こえてしまうぞ、結生…）

「む……うおじ……やま？」

「ん、んんー？」

（違う、やっぱり違うぞ、結生。そうか……これが舌足らずゆえの言い間違いというやつか！）

達郎は口に握り拳を当て笑いを堪^{こら}える。だって……これは仕方ない。結生のこんな可愛い姿を見せられたら、誰だつて微笑まずにはいられない。

ようやく、ここで達郎は自分の変化に驚く。里を出て以降、これまで笑うことがなかった自分に気付いたのだ。

（こんな他愛のないことで……）

これまでの達郎は、ゆきかぜの一件で自責の念に囚われていたからか、意識的に周囲の人々と交わらないようにしていた。

他者を顧みることもなく、外部からの刺激に鈍感であり続ける。それが達郎の日常だった。

だが、そんな日常は、結生との出会いによって唐突に終わりを迎えた。

事情は何にせよ、達郎の方から手を差し伸べた結生との暮らしが、結生の何気ない一言が、本人も気付かない内に達郎の心を徐々に開き、緩やかに癒^なっていたのだろう。

（……救われたのは、俺の方だったのかもな）

言い間違いの直らない結生が余りにも可愛くて、その後もしばらく、達郎は結生に事あるごとに魚屋の店名を尋ねた。

【2095年6月3日（金） 16：40 某商店街】

秋山 達郎：29歳

秋山 凜子：32歳

森田 結生：13歳

言い間違えると何故か達郎が笑ってくれたから、その後もしばらく、結生は達郎に問われる度にわざと間違い続けた。

学校帰り、制服姿の結生は夕食の食材を買いに魚屋を訪れた。今朝方、登校前に冷蔵庫の中を確認したら、夕飯の食材が少々心許なかったので、下校時に寄って帰ろうと決めていた。

幼い頃の結生は必死だった。身寄りのない自分が、達郎にまで見捨てられてしまつては適わないと、我が侘一つ言わず達郎と生活を共にした。

当時の達郎は全く笑わなかった。それこそ結生が不安に駆られ、時には薄ら寒く感じるほどに。そんな頃に起きたのが、あの魚屋さんでの言い間違い事件だった。

（あの頃は達郎の笑顔を見て、ただ安心したかったのよね…我ながら可愛い過ぎだわ）

結生の容姿は、年を経るごとに母のゆきかぜを思わせる。母親譲りの朗らかな性格で学校での人気も高い。

そして何と…胸のサイズも平均をゆうに超えているのだ。

そういうえば、数日前にリビングのソファーに座っていた達郎が、中間テストの答案用紙を持つ両手をわなわな震わせながら、何か呟いていたような…

「…、これは、ゆき…の上位互換…完全体…」

残念ながら、結生には達郎が何を言っているのか全く理解できなかったのだが…全科満点に近い点数なのだから、さしたる問題はないだろう。

結生は魚屋での買い物を済ませると家路を急いだ。

——私は達郎が好きだ。

よもや、こんな想いを抱くことになるとは結生も思いもしなかった。

今となつては記憶も朧げだが、幼かった頃の結生は周囲から一切関心を持たれず、無視され続けていたようなものだった。

だからこそ尚のこと、常に自分を気にかけてくれる、一番に扱ってくれる達郎に惹かれるのは無理もないことだった。

(よりにもよって、一回り以上も年の離れた親代りの男性を…って思わなくもないけれど。達郎が私に甘過ぎたのも悪いのよね)

結生と達郎が結ばれる上での障害は幾つかあるが、実を言えば年の差は大した問題ではない。

同年代の夫婦に比べ、少しばかり一緒にいられる期間が減る程度のことと、聡明な結生は割り切っている。

むしろ結生の気掛かりは別にあつた。それは、縁もゆかりもない達郎が、どうして自分を引き取ってくれたのかという疑問。

達郎が手を差し伸べてくれなければ、児童養護施設に送られていたに違いないだけに、現状に不満がある訳ではない。

ただ、達郎が注いでくれる愛情の裏には、何か理由があるような気がしていた。

幼い頃の実体験から、無償の愛などそう簡単に得られるものではないことを結生は知っていた。

（まあ、どんな理由があるにせよ、私の気持ちは変わらない。一心不乱にこの想いに殉ずるだけよ）

結生は夕暮れ時の空を見上げると、目を瞑り瞼の裏に達郎の姿を思い浮かべた。

——私は達郎が大好きだ。

——清潔感のあるナチュラルな藍色のマッシュヘアが好きだ。長めの前髪から垣間見える、優しい瞳に見つめられると胸がときめいて仕方がない。

——消防士の仕事で鍛えられた、適度に引き締まった身体も大好きだ。抱きしめられた時のことを考えるだけで喜びに心が震えるほどだ。

——月末には三十歳を迎えるのに、元々の童顔も相まって、未だ二十代前半と言っても差し支えない容姿には感動すら覚えてしまう。

——普段は不器用な優男に見えても、肝心な時には決して怖気付いたりしない。そんな頼りになるところも最高だ。

——他の女性には目もくれず、私にだけ愛情を注いでくれる様子などもう堪らない。

(…はっ、いけない。まぼろし 幻の達郎のせいで、危うく帰りが遅くなるところだったわ)

(大体、最後の「私にだけ愛情を」って件は、くだり 凜子さんに出会うまでの話であって…今や過去形だし。まったく、あの真性のブラコンお姉さんめ…)

達郎の姉である凜子。その容姿と中身は達郎の更に上を行く。

達郎と同じ髪色のショートヘアにきりりとした小振りな顔立ち。三十路を迎えてなお、メリハリの効いたスーパームデル級のそのスタイル。

てら 銜のない性格と古風な口調も相まって、男性だけでなく女性をも虜にしてしまうほどに魅力的だ。

その凜とした容姿と立ち振る舞いは、まさに武士と大和撫子を足して2で割って、現

代に最適化されたような異質な存在と言えよう。

それでいて、完璧かというと決してそうではなく、時折抜けているところを見せたり、恥入って赤面したりするのだ。

あの年齢にして未だ愛らしい一面まで備えているのだから、もはや意味が分からない。もしかしたら、頭はそれほど賢くないのかもしれない：

ともかく、そんな尊敬に値する女性が他人には目もくれず、弟の達郎にだけとことん甘くて一途なのだから、結生からすれば堪ったものではない。

(本当、達郎を溺愛しているのが見え見えよね…私が達郎と結ばれたとしても、近くにいられてはとても安心できないわ)

こともあろうに、今週末には凜子さんの誕生日パーティーがあるのだ。どうやら、凜子さんは今夜中に家に泊まりに来るらしい。

全くいい歳して自分の誕生日のために、わざわざ前泊するなんて…あのクールな見た目からはとても想像できないが、内心ではきつとウキウキしているに違いない。

「…はあ〜」

思わず溜息も出るというものだ。達郎となるべく二人きりにしないよう、今回も気を引き締めてかからねば。

あの二人、いつ間違いを犯すか分からない…いや、既にチュツチュしちやっているか

もしれないのだ。

(…大丈夫、私は負けない。最後は想いの強い方が必ず勝つ！)

「達郎…貴方は私を救ってくれた。だから、今度は私が達郎のことを捕まえるわ。それこそが私の求める最高の結末…完全無欠のハッピーエンドよ!!」

結生は自宅マンション前に到着すると、右手に持った買い物袋を高々と掲げ、声高らかに達郎への想いを爆発させた。

無論、道行く人々の奇異の目など、一切お構いなしだったのは言うまでもない…

結生の恋は、達郎しか知らないし、他の男を知ろうとも思わない。

この世に達郎さえいれば良く、他に大切な物など実のところ何も無い。

ついでに言えば、達郎の返事すらも必要ないという…とてもとても真つ直ぐで、けれども些^{ちか}か偏^{へん}つたものだった。

了